

【議事要旨】

第4回 野鳥公園整備に関する検討委員会

- 1 日 時 平成26年6月2日（月） 14:00~15:30
- 2 場 所 あいれふ 7階 第2研修室
- 3 出席者〔委員〕
春日井委員長，大谷委員，小島委員，坂井委員，田村委員，
中村委員，森橋委員
- 4 議事次第
 - (1)議 題
野鳥公園整備の方向性について
 - (2)その他

【配付資料】

- 資料1 野鳥公園整備にあたっての考え方等について
- 資料2 野鳥公園に導入する機能と施設要素
- 資料3 ゾーニング図および導入する施設要素
- 資料4 各ゾーンのイメージ
- 参考資料1 野鳥公園で保全すべき鳥類について
- 参考資料2 エコパークゾーンの海岸部にみられる植物
- 参考資料3 和白海域の水・底質改善の検討について

第4回 野鳥公園整備検討委員会 議事要旨

	<p>○ 開会</p> <p>計画部長挨拶</p> <p>○ 本検討委員会の今後の進め方について</p>
事務局	<p>本日の検討委員会では、特に野鳥公園に導入する施設要素について意見を賜りたい。</p> <p>また、本日までに頂いた意見等を踏まえ、さらに必要な検討を加えて10月頃を目途に第5回検討委員会を開催し、整備プランの案を提示したいと考えている。そこでの意見を踏まえて市として内容を取りまとめていきたい。</p>
委員長	<p>本検討委員会は、様々な検討に時間を要するため、本日を含めてあと2回の開催が予定されている。次回は、今回の意見を踏まえた施設整備の考え方の案が示されることになり、その案について意見をまとめることになる。</p> <p>1. 議事</p> <p>(1) 野鳥公園整備の方向性について</p>
委員長	<p>これまでの検討結果を取りまとめた「野鳥公園整備にあたっての考え方等について」を確認頂いた後、野鳥公園に導入する機能と施設要素について議論頂きたい。</p> <p>事務局から資料1「野鳥公園整備にあたっての考え方等について」の説明をお願いします。</p>
事務局	<p>(資料1について事務局より説明)</p> <p>資料1：野鳥公園整備にあたっての考え方等について</p>
委員長	<p>整備の方向性やゾーニングの考え方など、これまでの検討結果の確認であるが、何か意見はあるか。</p>
各委員	<p>(特に意見なし)</p>
委員長	<p>意見が無いようなので、この内容で確認したということで、資料2「野鳥</p>

事務局	<p>公園に導入する機能と施設要素」に進む。事務局より説明をお願いします。</p> <p>(資料2, 資料3, 資料4について事務局より説明)</p> <p>資料2: 野鳥公園に導入する機能と施設要素</p> <p>資料3: ゾーニング図および導入する施設要素</p> <p>資料4: 各ゾーンのイメージ</p>
委員	<p>資料2の「海の自然を学ぶゾーン」について確認したい。貧酸素水塊の問題は、博多湾だけの特有の問題ではないと思うが、どうか。日本は海に囲まれており、奥まった湾では、同様の問題が起こっているのか。先進事例として、覆砂等を行い貧酸素水塊が改善された事例があるのか。</p>
委員長	<p>貧酸素水塊は、背後に都市部をかかえた内湾では、ほとんどどこでも起きている。東京湾、伊勢湾、大阪湾の深いところでは、夏場の6月から9月くらいまでは貧酸素状態になっている。これらの場所は、富栄養な海であるためプランクトンが大量発生し、それが沈降して底に溜まる。その後、プランクトンが分解されるときに酸素を消費するが、夏場だと海面が温かく、深いところは冷たいままで海水の循環が起きないため、水深が深い場所ではどんどん酸素濃度が低くなる。これが主要な3大湾では、夏場にひどい状態になっている。</p> <p>博多湾でも、深いところは貧酸素状態になりやすい。他の海域に比べるとまだよいと思うが、風が吹くと貧酸素水塊が上にあがってきて、生物に影響を与えることになる。この状態を少しでも改善していくことが求められている。</p>
委員	<p>貧酸素水塊を克服した身近な例としては、北九州市の洞海湾がある。洞海湾では、以前、赤潮や貧酸素の問題が起こっていた。覆砂や藻場造成、人工の砂浜をつくるなどの対策を行った結果、ここ数年は、貧酸素が起きていないようだ。一番効果があった対策がどれなのかまでは解っていないようだが、研究が進められている。</p> <p>資料2の各ゾーンについては、いい形でまとめられたと思う。「海の自然を学ぶゾーン」で一番問題になるのは、貧酸素水塊をいかに克服して、海の自然を学べる形にするかということである。浅場を造成するという方向で検討されていると思うが、浅場を造成するときの材料をどこから持ってくるかによって工事の費用に直接影響すると思う。博多湾で行っている航路浚渫の土</p>

<p>委員</p>	<p>砂を有効活用して浅場造成に用いることができないだろうか。</p> <p>現在、百道沖で浚渫土砂による窪地の埋戻しを行っている。材料については、異質な材料を持ってくるよりも、比較的近接した場所で発生する浚渫土砂を使った方が環境に良いと考える。</p> <p>博多湾の環境創造の取り組みとして検討を行い、できることについては是非やっていきたいと考えている。</p>
<p>事務局</p>	<p>前回の会議で和白海域の課題等について説明して頂いた。生物の生息環境を将来にわたって持続可能なものにするためには、エコパークゾーン全体での取り組みが重要であり、公園整備とあわせて、前面海域の環境の質の向上にも取り組んでいきたいと考えている。その中で、有効活用という視点は大切であり、是非、ご協力をお願いしたい。</p>
<p>委員</p>	<p>博多湾全体の環境を考えていくうえで、そこで発生した浚渫土砂を上手く活用して博多湾の中の環境改善に生かすという視点は、非常に重要なポイントである。全国の様々なところで、干潟や浅場の重要性ということが言われているが、有効に使える砂の材料を確保するのに困っているところが多い。そういう意味で博多港の中で発生する浚渫土砂を有効に活用できることは、一石二鳥であると考えている。最近では、浚渫土砂以外の陸域で発生した建設残土などを利用するという動きもあるが、陸のものを使う場合は様々なステップを踏む必要があり、まだまだハードルが高い。海の中を海の中で活かすということは、様々な関係者の合意も得やすいと思う。事実、窪地の埋戻しでも使われているということであれば、大いに検討して頂きたい。</p>
<p>委員長</p>	<p>和白海域のように静穏な海域では、水深3メートル程度の浅いところでも干潟とくらべるとそれなりに深く、有機物が溜まり貧酸素状態になる。ちょっとした波でも酸素が供給できるようもう少し浅い場があると、そこで栄養塩を生態系が採りこんで系外除去する形になり、深いところの良くない底質もだんだん改善されるという好循環が起こる。そのためには、干潟や浅場がある程度増えた方が良い。浚渫土砂を有効活用して、そういう場を少しずつ増やしていくことは、環境を良くしていくためにとても有効である。さらにアマモが生育するなど、様々な価値が加わることで、この地域の環境に関する付加価値があがってくる。浚渫土砂の有効活用については、是非、検討して頂きたい。</p>

	<p>尾道糸崎港で60ヘクタール、徳山下松港で30ヘクタールの干潟を浚渫土砂でつくった事例がある。徳山下松港では、非常に良い生態系が復活しているようだ。少しずつそういう干潟があることによって、内湾の環境が良くなってくると思う。どこまでやるのかについては、今後、研究していくことが必要である。</p>
委員	<p>博多湾の環境を改善するためには、どのくらいの大きさの干潟や浅場が必要になるのか。</p>
委員長	<p>博多湾全域の環境を改善するためには、相当の面積の干潟や浅場が必要である。自然の干潟が埋め立てられたことにより機能が低下し、さらに陸上からの流入負荷が増えたことにより湾全体の環境が悪くなってしまった。下水道の整備が進んだことにより流入負荷が減ってきたが、底質は悪いままである。どのくらいの規模の干潟や浅場が必要であるかというのは難しいが、今よりも環境を良くするために生物の力を使って少しずつ良くするための仕掛けとして干潟や浅場が必要になる。生態系をより自然に少しずつ良くすることが求められており、それに向かって努力していくということが重要である。</p>
委員	<p>「海の自然を学ぶゾーン」については、施設要素として浅場、アマモ場、石組みとされており、これは主な機能を実現するために必要な施設要素だろうと理解している。普通の地形から考えると、まず干潮時には干出する干潟があり、次にいつも水に浸かっているアマモ場があって、さらにもう少し深い浅場と言われる海域があるというように、だんだん深くなる連続的な地形の勾配があることが自然であるので、可能であれば、そういった海域を工夫してつくるという算段をしてほしい。鳥の採餌場になるだけでなく、生物調査の場所など海の機能を学ぶ場になることも考えられる。</p>
委員長	<p>参考資料3は、和白海域の粒度組成、COD、硫化物、底生生物の状況が示された資料である。和白干潟の浅いところには、底生生物がそれなりにいるが、中央の深いところは、硫化物が多くて底生生物が少なく、生物の生息環境として悪いことがわかる。また、西の方に行くに従って硫化物は多くなるが、生物は結構みられる。これは、海水交換の度合いや貧酸素状態にあまりならない環境などによることが考えられる。生物の生息環境の悪いところを改善していくためにも浅場や干潟が有効であると考えている。</p>

委員	<p>「海の自然を学ぶゾーン」のイメージ図に人工的な階段護岸が書かれている。浅場や石組みなどに連続的に自然な勾配でつながるイメージを考える場合、階段護岸をつくることを前提にしたら自然な勾配とならない。どうかできないだろうか。</p> <p>「自然を楽しむゾーン」については、家族での散策や市民による植樹など大変よいことが示されている。ガイダンスセンターについては、車の寄り付きや利用者の水平移動を考慮した場所の方がよいと考える。</p> <p>眺望については、将来、樹木が成長したときに景色が見えなくなることがないように周りの木の植え方には気を付けないといけない。</p>
委員長	<p>神奈川県久里浜緑地に22年ぶりに行った。かつては、展望台からの眺望が良かったのだが、樹木が成長しすぎて眺めることができない状況になっていた。樹木は、どんどん成長するので気を付けないといけない。ガイダンスセンターや駐車場の配置については、少子高齢化も踏まえて詳細な施設配置の議論の中で検討してほしい。</p> <p>「海辺の自然を学ぶゾーン」と「海辺に親しむゾーン」のイメージ図の階段護岸については、前面を干潟にまでするかどうかはあるが、安全性の確保やどこまで人を入れるのかを含めて詳細な検討の中で考えてほしい。</p>
委員	<p>人の立場から見たときに、どこからどうアクセスするのか、ゾーン間をどのように人が移動していくのかについては、個別の施設の検討の中で考えて頂けると思っている。アイランドシティ全体の中で、ここがどういう位置付けになっているのかも踏まえて検討をお願いしたい。</p> <p>鳥の立場から見たときに、「自然を楽しむゾーン」のイメージ図では、鳥がやってこないのではないかと思う。鳥に来てほしい場所なのか、人間に来てほしい場所なのか、考え方を教えてほしい。</p>
事務局	<p>ゾーニングの考え方については、第1回検討委員会の中において、自然が成長する場所と人が主に利用する場所はきちんと分けるべきであるとの意見を頂いた。ゾーニング図では、左右で大きく分けているが、右側の「自然の成長を学ぶゾーン」は、自然を成長させていく場として人の立ち入りがある程度制限しながら自然を根付かせていくエリアである。一方の左側の「自然を楽しむゾーン」は、遊んだり、眺めを楽しむなど、人が利用することを主眼においたエリアである。</p>

<p>委員</p>	<p>コンセプトは、「成長する野鳥公園～人と自然が共に成長し続けるため～」になっている。このコンセプトを中心に様々な取組みを行ってもらうことになると思う。</p> <p>浅場，アマモ場，石組みとあるが，例えば浅場について，最初に決めたことをどんどんやっていくということではなくて，貧酸素水塊の発生状況をみながらやっていくとか，覆砂をやる場合も必要性を検討するなど，きめ細かく現在の状況と野鳥公園の考え方をチェックしていき，関わる人たちと一緒に公園づくりをしていく必要がある。</p> <p>時間とともに公園の形が変わっていくかもしれないが，成長する野鳥公園という取組みは全国でも例をみないので，関わる人たちと協調して進めてほしい。</p>
<p>委員長</p>	<p>成長する野鳥公園というコンセプトは，新しい表現だと思う。事業をやっていくうえで何らかの形で引き続き市民の意見を聞きながら，整備にその意見を反映させるような仕組みを担保しないといけないと思う。</p>
<p>事務局</p>	<p>市民が参加する公園づくりの実現のために，その仕組みづくりについて，しっかりと検討していく必要があると考えている。</p> <p>市民だけでなくNPO，環境保護団体，専門家などによるアドバイスを受けながらやっていく仕組みづくりをこれから整えていかなければならないと考えている。</p>
<p>委員</p>	<p>参考までに紹介したい事例がある。韓国の金浦市では，アイランドシティの約5倍程度の広さの住宅団地開発が行われており，あわせて約60ヘクタールの野鳥公園が整備されている。</p> <p>金浦市は米の産地であるが，近くの農家が野鳥公園内の数ヘクタールで米をつくって鳥の餌にしているということであり，野鳥公園内で餌の生産まで行っているという事例である。</p>
<p>委員長</p>	<p>鳥を集めるという意味では，ひとつの仕掛けかもしれない。</p>
<p>委員</p>	<p>資料1の2ページに順応的管理手法を用いるとあるが，それをどういうふうに具体化するのが難しい。餌を蒔いて鳥を集めることも考えられるが，</p>

	<p>基本的には可能な限り自然のままで餌となる底生生物が増えて野鳥がやってくるという方がよいと考える。</p> <p>イメージ図の最後に周辺住宅との調和とあり、幅広の植生帯をつくるイメージになっている。野鳥がかなりやってきたときに、幅広の植生帯があることで周辺住宅への糞問題は解決できるのか。</p>
委員	<p>糞の問題については、心配いらなと思う。</p> <p>例えば、ミヤマガラスという冬鳥が大陸からたくさん九州北部にやってくるが、それで憤慨する人はいない。シギやチドリもたくさんの糞をするが、干潟で食べた餌を川の上流などに持っていくことによって物質循環が起きる。自然の多様性の中で考えれば問題にはならない。逆に糞が問題になるような都市づくりや住宅開発こそ考えないといけないのかもしれない。生物多様性条約というのがあるが、様々な生き物が生きていけるような環境づくりをするべきであり、そういう視点に立てば糞問題については、問題なくやっていると考える。</p>
委員長	<p>海鳥のような鳥、特に渡り鳥は、逆に干潟をきれいにしていくということでムクドリなどとは違うようである。</p>
委員	<p>将来、緑地の緑が成長した後のことを考えると、安全、安心、防犯の課題が出てくると思う。明るくすることはあまりできないと思うので、監視カメラや防護柵の設置が必要と考える。アライグマなどの多様性を乱す外来生物の侵入対策も考えるべきだろう。</p>
委員長	<p>植生は、10年、20年、30年先にどうなるのか上手く考えていくべきである。</p>
委員長	<p>他に意見は無いか。</p> <p>また、全体を通して意見は無いか。</p>
各委員	<p>(特に意見なし)</p>
委員長	<p>特にないようであれば、最後に、委員より紹介したいことがあるということなので説明をお願いします。</p>

委員	<p>野鳥公園については、ランドスケープの専門家が注目している。配った資料は、福岡大学の柴田久准教授が関わって作成された成果報告書であり、柴田先生から頂いたので紹介したい。内容は、カリフォルニア大学バークレー校の先生方と一緒にアイランドシティを対象地にして、学生を入れたワークショップやシンポジウムを行ったことの成果報告書である。</p> <p>全体としては、水面を大事にする、野鳥を大事にする精神で作られており、本検討委員会と方向性が同じ部分が多々あると感じている。</p> <p>特にシンポジウムやワークショップを用いて提案するという手法は、大変参考になる。水面の残し方の考えに違いはあるが、これから基本計画をつくっていくにあたって、参考となる事項も多いと感じている。</p>
委員長	<p>本報告書について事務局の考え方を確認したい。</p>
事務局	<p>紹介があった報告書については、本市も頂いており内容を拝見させて頂いた。大変な努力でまとめられた報告書であり敬意を表したい。</p> <p>ラウンジカフェによる意見を踏まえた本検討委員会の議論では、野鳥公園は、エコパークゾーン全体で一体的に整備するという大前提のもとに、これまで整備の考え方をまとめてきている。</p> <p>鳥類の保全についても、これまで検討してきたとおり、エコパークゾーンや博多湾全体で担っていくべきものであり、野鳥公園内では特にシギ・チドリ類の休息場等を整えていきたいという考えである。たとえば、クロツラヘラサギについては、現在の飛来状況を見ると、自然の生息場である今津干潟や多々良川河口の干潟などを主要な生息場としている。また、そういった場所もワンシーズンずっとそこにいるということではなく、餌の状況に応じて内陸の池に移動することもあるようなので、どこだけが必要ということだけでなく、それぞれの場所をきちんと保全していくということが重要であると認識している。</p> <p>ラウンジカフェでは野鳥公園に求める役割として、鳥の観察をはじめとした環境学習や、自然の成長を行うなどに加えて、遠足・ピクニックや地域交流など人の利用に関するニーズも高く、そういったことを踏まえて整備の検討を重ねてきた。</p> <p>報告書については、これまで検討してきた公園のつくりと少し異なる部分もあるが、公園づくりの進め方や手法、考え方など、あらためて確認して参考にしていきたい。</p>

<p>委員長</p>	<p>当検討委員会は4回開催されたが、エコパークゾーンに隣接した野鳥公園のあり方としては、特にシギ・チドリ類の休息場や採餌場としての機能が必要であるということであった。また、野鳥公園だけで完結するというだけでなくエコパークゾーンと一体となった利用の中で、役割がどうあって、さらには背後の街との関係において、人間と鳥の共存を図りバランスをとって、計画をつくっていかうということであったと思う。さらに、その中で人の利用という観点からは、観察学習やピクニック、遠足などの地域交流的な利用のニーズを踏まえた場を計画していかうということで議論を行ってきた。</p> <p>紹介を頂いた報告書については、とても参考になる面もあるが、我々が検討を重ねてきた前提と異なる部分もあるため、出てきた絵姿が違う方向性になっているようだ。</p> <p>意見があれば伺いたい。</p>
<p>委員</p>	<p>クロツラヘラサギを中心に検討された報告書としては面白い内容になっている。クロツラヘラサギは、1981年～1982年頃に北部九州ではじめて確認されて、その後、どんどん数が増えてきた。しばらくは、今津地区に多くいたが、今では、沖縄県、鹿児島県、熊本県、宮崎県にまで分散している。保全については、福岡市の場合、西部地域を含めた博多湾全体で考えていくべきである。</p> <p>市民と一緒にした計画づくりの進め方や手法、考え方などについては、よいことだと思うので参考にしていけるべきであり、同じような意見がラウンジカフェでも出ていたと思う。</p>
<p>委員長</p>	<p>かつては、クロツラヘラサギは、どこにいたのか。</p>
<p>委員</p>	<p>クロツラヘラサギは、繁殖地が朝鮮半島の東シナ海側の離島などであり、越冬地は、台湾や香港、ベトナム北部などである。かつて台湾に越冬していたクロツラヘラサギが大量死したことがあった。それとの関連性は不明であるが、九州北部にクロツラヘラサギが多くなってきている。福岡市の場合、博多湾全体で役割分担を考えないといけないし、場合によっては、九州全体で考えないといけないかもしれない。</p>

<p>委員長</p>	<p>現在、クロツラヘラサギは九州各地に生息場所を見つけて来ているとのことである。リスク分散的には望ましいことであり、福岡市においては、今津の干潟や多々良川河口などいろいろな場があるということはよいことだと思う。たまには、野鳥公園にクロツラヘラサギが来てもらうのもよいと思うが、野鳥公園をクロツラヘラサギに特化した場にするには課題も多いだろう。</p> <p>アイランドシティのまちづくりの中で、魅力づくりとして野鳥公園をいかに使うかということが重要である。紹介を頂いた報告書については、市民と一緒に作った計画づくりの進め方や手法、考え方などが参考になるため、アイランドシティのまちづくりの中、野鳥公園づくりの中で生かしてもらおうということでやって頂きたいと思う。</p>
<p>委員</p>	<p>紹介を頂いた報告書で強調されているのは環境教育であり、私たちも野鳥公園で環境教育を目指していこうとしていることの方角性は同じだろう。特に、市民と一緒に活用、管理、運営していくということは、今後、野鳥公園づくりで進めていくやり方そのものだと思う。</p> <p>そのあたりは十分に参考になる提案をされていると思うので、是非、取り入れてほしい。</p>
<p>委員長</p>	<p>博多湾は、福岡市という大都市に隣接しているが、とても美しい湾であり、福岡市は非常に良い環境に恵まれている。そういう中でいかにアイランドシティをすばらしいまちにしていくかは、福岡市役所の皆さんの力量に係ってくる。魅力あるまちの中に、魅力ある野鳥公園をつくってもらえればと思う。</p> <p>2. その他</p>
<p>委員長</p>	<p>それでは、「2. その他」に移ることとするが、事務局から何かあるか。</p>
<p>事務局</p>	<p>次回のご案内をさせて頂きたい。</p> <p>本日まで頂いた意見をもとに、公園全体の適切な施設の配置、動線等を検討して、次回の第5回検討委員会で具体的な整備計画の案として議論を頂きたい。日程については、10月頃を予定している。</p>

委員長	以上で本日の議事を終わる。進行を事務局に返す。
事務局	第4回野鳥公園整備に関する検討委員会を終了する。 閉会